

博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

第 13 号

2018年9月

京都精華大学

はしがき

本編は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条による公表を目的として、平成30年度本学において博士(芸術)の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨を収録したものである。

目次

報告番号	学位の種類	氏名	学位論文題目	ページ
甲 第29号	博士 (芸術)	Antononoka Olga	Manga-Drag:Female Address, Male Cross-Dressing Character, and Media Performativity ドラグとしてのマンガ：女性的な表 現、女装キャラクター、メディアの パフォーマンス性	4

氏名	Antononoka(アントニョノカ) Olga(オルガ)		
学位の種類	博士(芸術)		
報告番号	甲第29号		
学位授与の日付	2018年9月17日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	Manga-Drag:Female Address, Male Cross-Dressing Character, and Media performativity ドラッグとしてのマンガ：女性的な表現、女装キャラクター、メディアのパフォーマンス性		
論文審査委員	主査	教授	レベッカ・ジェニスン
	副査	教授	吉村 和真
	副査	教授	斎藤 光
	副査	教授	佐藤 守弘
	副査	ストックホルム大学 教授	ジャクリーヌ・ベルント

内容の要旨

第1章 メディアのパフォーマンス性と意味の複数性

第1章では、これからの研究のフレームワークを述べる。コミックとして、マンガの構成にはジュディ・バトラーの意味でパフォーマンス性がある。コミックの構成は二つの記号的なシステムの絡み合わせから成り立っている。それらはすなわち、文書と絵である。文書によって伝わる内容、と絵によって伝わる内容がお互いの意味を反復し、追加するが、伝わる内容は異なることがありえる。または、コミックは抽象的であり、絵と文書はお互いを反復しますが、物質性のある「元」はない。絵と文章の不徹底な相互関係によって多様な意味を持つことが可能となっている。従って、誘起させる読みも多様になる。

東浩紀によれば、ポストモダンメディアの消費は多様な読みに基づいている。つまり、ポストモダン消費はマンガの物理的な意味の多様性を生み出す構成を利用している。マンガは構成的に：断片化、反復、引用に基づいている。ポストモダンマンガの中の引用と反復はジャンルシステムでは明らかに見られる。

マンガ研究ではジャンル論はまだ不足点が多い。歴史的と比較的な研究は少ない。その為、本研究では現在に見られるジャンルの約束事を研究の下となる。現在のジャンルの約束事は80・90年代の間設立された。日本のポピュラーカルチャーにおけるジャンルの区別は

ユニークだ。日本のマンガジャンルはジェンダーと年齢によって大きく区別され、少年、青年、少女、女性マンガに分かれている。テーマは区別の下ではなく、美学的なスタイル、物語の流れ、キャラクター設定とキャラクター関係によって主に区別されている。本論ではジェンダー化されたジャンルに注目し、ジャンル横断的な消費をマンガの基本的な意味の多様性の観点から分析する。

基本としては、女性読者によってジャンルの横断的な読みが期待されている。バウエンス-杉本によって、現在青年マンガと少年マンガ読者の50%は女性である。その為最近の男性向けジャンルは女性読者に対応する。バウエンス-杉本やラマールは主に男性キャラクターの設定と描写について分析し、女性読者の影響に注目する。本論文では別の女性読者と男性読者の関わりを両方適すと分析の観点から調べる。女性読者向けに行われるジャンル横断的な約束事の利用は男性的なコンテンツの意味を変える。男性的な主人公のイメージも多様化になる。

ジャンルとジャンル横断的な消費をキャラクターに注目し、分析行う。ラマールの「魂に満ちた身体」ではキャラクター分析を念頭に、ポストモダン物語を中心としたキャラクターを分析する。「魂に満ちた身体」はジャンルの中における引用性と断片化を体現する。キャラクターの図式だけでもキャラクターの物語への役割、人格など解釈できる。つまり、私が示したいことは、このようなキャラクターは、別のジャンルに移すことによって、引用を読み取る読者が「魂に満ちた身体」に注目し、物語を再解釈することがありえる。

ジャンル横断的な読みの議論は女性読者向けの約束事を中心に分析されている。マンガ構成、メディアミックス、データベース的・ポストモダンの消費はキャラクターを中心に議論されている（ラマール、バウエンス-杉本、藤本）。では、女性読者向けの様相としてキャラクターを中心に考えるとラマールとバウエンス-杉本の論考に従って、男性キャラクターに注目する。その論考を続けるために男性キャラクターを定義する。新たな男性キャラクターは「美少年」だと論じていく。美少年は女性読者に向けてジャンル横断的に引用されつつ、ジャンルの中で新たなコンテキストに入れられている。男性読者向けの新たなキャラクター造詣とも図式にすることができる。以下では、ジャンル横断的な消費を美少年キャラクターを中心に分析していく。

新たな男性キャラクターについての議論の焦点を絞る為に、女装キャラクターに注目する。事例として、最近ジャンルに取り上げられている歌舞伎の設定に注目し、女形のキャラクターを美少年の事例として分析する。最近の15年間、マンガでは伝統芸と伝統工芸というテーマはよく取り上げられている、ブームになっているとも言えるだろう。伝統芸ブームに所属する歌舞伎マンガは、各ジャンルに取り上げられている。歴史的な女形も、現代メディアにおける女形のイメージも、分析すると、美少年の表象としてとらえられる部分が多い。その為、女形を青年と少年マンガのモチーフとして取り上げると、美少年としてではなく女形の写実的な描写として読むことができる。または、女性マンガ読者として（少年・青年マンガの女形を）美少年として読むことができる。

美少年はジェンダーに関して批評性を体現するキャラクターとして分析する傾向がある。美少年が少年と青年マンガにおけるときにどのようなジェンダーについての立場を表すのだろうと分析することもできる。読者とテキストの総合関係の中主人公のジェンダーにも注目する。

従って、青年と少年マンガにおける女形は主役または主人公の相手役になっており、そこに、マンガ業界における大きな変化を見ることができると考えられる。つまり、男性的な内容の変化（テーマ、プロットの発展）、または主人公の新たな「男性性」や期待されている助成マンガ約束事のリテラシーも明らかとなる。

第2章 少女マンガにおける美少年

女性ジャンル研究では、女性ジャンルにおける批評性を強調し、多様な物語の中に含まれている意味を階層的に考える傾向が見られる、従って、批評的な意味は物語の正しい、読み取るべき意味として優先されている。結果的に、意味の多様性と文脈上の意味は視野に入られていない。批評的な意味を強調する為、物語のキャラクター設定とテーマが注目されている。しかし、メディアの特有性、約束事、線、コマ、などは注目されていない。

少女マンガの批評的な可能性は二つの観点から研究されている：1. 批評的なテーマの表象（ジェンダーを中心に）；2. 女性ファンの転覆的な行為（男性キャラクターを客体としてまなざす、自分の性欲望を受け入れること、批評的なコミュニティに参加することなど）。本論ではテキスト分析に注目し、表象された内容とその形式を合わせて意味の多様性を分析する。

第2章では、まず始めに少女マンガにおける男性キャラクターの歴史的な発展分析を行う。少女マンガとボーイズラブマンガの男性主人公の約束事を分析し、重なる約束事から美少年の基本造詣を定義する。現在では「美少年」という概念は幅広く使われている。例えば、2015年に出版された溝口彰子の論文では「美少年」は70年代、特に「ジュネ」マンガ雑誌の美学的な感覚の美しいヨーロッパの貴族に所属する少年だ。同時に、「美少年」は魅力的な男性キャラクター、あるいは実在するアイドルなどに関しても使われている。家父長制文化では美しいという表現は男性に関して使われていない傾向がある、「美」という概念は、見られている、つまり客体の立場と関連付けられているだろう。私の美少年の定義は、客体にもなりうるという美少年の特徴から始まる。

物語内容表象を中心に分析する、大城、石田、長池などによると少女マンガとボーイズラブマンガにおける男性キャラクターはまなざしの客体になれる、主体にもなれる、または、他の美少年キャラクターのまなざしを操ることができる。すなわち、美少年は自らの主体性と客体性の間を流動的に移動し、そして主体性を意識的に選択していると言える。そうすると、この主人公は主なファルスの概念から離れていく。

美少年は主に女性主人公と同じ約束事を通じて、内面のビジュアル化として描かれる。従って、主人公であったり同一化を想起させるキャラクターとして表現されている。

つまり、美少年は読者に対していくつの立場になりえることができた。1. 読者が美少年の客体的な立場と同一化することができる、2. 読者は美少年を客体としてまなざすことができる、3. 美少年の主體的な立場から物語を読む、または、4. 女性の読者は、主人公を主体としても読めるが、同時に、主人公が男性の身体を持っていることによる距離感もそこに読み取っている。

さらに、ラカンのまなざし論を元に、「美少年」が見る、見られる、自分を見せているように描かれていると示す。読者は彼に感情移入することもでき、かつ、客観的な読みを行うこともできる。そのうえで、ファルスを超えた主体性が「美少年」特有の約束事から成り立つ過程を分析する。「美少年」の用語を利用する理由は、「美」=見られる、客体性の可能性を示す；「少年」ファルスがない・ファルスを超える男性、という2点による。

物語内容中心の美少年分析の先行研究に基づいて、美少年の流動的な客体性・主体性に注目し、次に美少年の役割とその物理的な表現様相に注目する。

物語中心に美少年分析において強調されている、男性の身体に重なる流動的なジェンダーは転覆的な可能性を持つだろう。大友りおの議論によるとボーイズラブマンガの美少年の身体は内面のビジュアル化に過ぎず、身体は物質性を持たない、ジェンダーを体現すると主張している。これは決定的なジェンダーが身体の結果に聞こえざるを得ない。美少年の流動的なジェンダーは男性身体と結ばれることができないように聞こえるだろう。そのような理由により、身体の内面のビジュアル化と物質性を示す身体をそれぞれ分析する。

次に押山美知子のマンガ表現の約束事における「女性性」と「男性性」の議論を手がかりに、美少年を表現するジェンダー化された約束事を分析する。さらにトマス・ラマールの可塑的な線および構築的な線に関連付けている認識的な解釈／情動的な解釈といった観点から、ジェンダー化された約束事を分析する。

可塑的な線を女性的な約束事と、構成的な線を男性的な約束事と比較することで、線によって示されるキャラクターの客体性と主体性を分析する。ラマールと押山の両者の議論から、可塑的／女性的表現は不死なる内面（＝魂）を表し、構成的／男性的表現は身体のも物質性、死に行く身体を表すものであると言える。

それに加えて、可塑的と構築的な線を区別された描写を越えた線の機能として考えられる。美少年の身体を描く線を通じて「魂に満ちた身体」と定義し、美少年の身体は体、服装、彼の内面を表す背景のコマ割りと記号の組み合わせによって成り立つ存在であると言えることができる（LaMarre 2009: 229）。

事例を通じて、実際の物語における物語の断片化、コマ割り、線、他の作用されている約束事の応用分析を行う。可塑的と構築的な線の応用と、可塑的と構築的な機能とそれによって意味の複数性が生じると示す。竹宮恵子の「風と木の詩」を中心に少女マンガにおける美少年の約束事の発展を辿って、嶋木あこの「ぴんとこな」を事例に、70年代から開発され

た約束事が現在でも大きく使われ、表現形式の基本であることを示す。従って、少女マンガの男性主人公は主に女性の主人公と同じ可塑的な線で描かれていることが明らかになる。目に注目し、体を美しく描いて、服装と髪を記号的に風、花、鳥などの記号的な様相と絡み合わせて、キャラクターの内面モノログに合わせながら、雰囲気とキャラクターの目線から見た意味合いを表現する。つまり、感情移入と同一化を容易にすると推測する。このような描写ではキャラクターデザイン、服装、記号的なデザイン様相、コマ割、全ての視覚的な様相はキャラクターの内面を表現する。一方で、身体に注目することによって読者とキャラクターとの距離を有効にするために構築的な線描は主に扱われているということを示す。構築的な線は暴力的な、愛情のない性描写、または客観的な立場を表す。例えば愛情のないセックスシーンは「風と木の詩」でも、「ぴんとこな」でもキャラクターの身体とバックグラウンドの建物、家具、物のディテールに注目し、キャラクターの体を物理的な環境に置き、キャラクターの内面的な苦しみを表現上では後回しにしている。

最後に、美少年を定義する。客体性と主体性の間流動的なまなざしに対しての立場に加えて、意思的な選択肢としてのエージェンシーはファルスを超えている。美少年は同一化と感情移入を有効にするキャラクターとして描かれ、必要に応じて、男性的な体によって距離をも示す。同一化と距離は可塑的と構築的な線によって仲介されている。

美少年を定義したうえで、次にマンガの二つの批評性が生じるレベル：批評的なテーマの表象と家父長制の用語の意味の拡張に注目する。青年と少年マンガにおける女性マンガの約束事分析と通じて1. 第3章では青年マンガにおける「花の24年組」の批評的なテーマ挿入と、2. 第4章では少年マンガ読者に関して、少女マンガリテラシーを期待する少年マンガにおける少女とボーイズラブパロディについて述べる。

第3章 青年マンガにおける女装美少年の批評的な可能性

第3章ではたなか亜紀夫とデビッド・宮原の「かぶく者」を事例に、現代マンガにおけるジェンダー表象とジェンダー化された消費に関しての大きな変化の証言をみていく。女性ジャンルと批評性を自動的に結びつけることは現在の状況には当てはまらないと思われる。70年代、特に「花の24年組」によって開発された新たな約束事、批評的なテーマと美少年のジェンダー表現は現在の少女とボーイズラブマンガの「ネタ」になった。ロマンスにエキゾチックな風味、ドラマチックなプロットの発展、興奮を誘発する約束事に再利用された。さらに、批評的な内容を描き、語り手として称賛されている女性マンガ作家は、キャリアの発展として青年マンガの作家になることも多い。従って、現在批評的と評価されているジャンルは青年マンガだともいえるだろう。

青年マンガに含まれている「花の24年組」の批評的な約束事は、新たな批評的なポテンシャルを得ることになる。批評的な意味、批評的な消費は物語の意味の多様性の文脈の中で

分析する必要があると論考する。「かぶく者」を事例に意味の多様性を分析する。青年マンガにおける女性マンガの約束事を挿入することによって生じる新たな解釈を探究する。青年マンガである『かぶく者』における、美少年キャラクターと類似性をもつ女形キャラクターの分析を通して、本作品に対するジェンダー批評的な読解を行う。

始めに、女形の歴史的な発展と現代のイメージに注目する。女形は「女性」を演じているのではなく、男性の身体性の上に「若衆」と「女性らしさ」のエロティックなあるいはまなざしを引く要素とを組み合わせている。そのため演出の意味解釈は流動的であり、また観客とのかかわりによって複数の解釈が可能となっている。

女形は、江戸時代の家父長制においては、「ファルスを持つ成人男性ではない立場におかれ、成人男性の性的な客体とされた。女形の色気は、「若衆」の男性らしさと、女性らしさの色を重ねていた。同時に男性として結婚し、子供を持つことも可能だった。従って、女形は社会に対して特有な新たなジェンダーであった。女装する人物でなく、女形ジェンダーだった。

現代において女形の社会的な立場は変化し、女装を日常では行わず、舞台の外では男性として暮らし、舞台上で女装するような、文字通りに女装する人、クロスドレッサーになった。その為、本論で取り上げる全ての事例は現在の女形を扱う作品である。現在の女形の社会的な立場は、改めて、ファルスを持つ強者ではなく、家父長制から離れた「他者」としてメディアの中で紹介されている。その点では、女形は美少年に表面的に似ていると言うことができる。つまり女形をマンガにおいて表現するとき、女形は美少年キャラクターになりうるのである。

歴史的に女形と美少年の類似性を分析し、デビッド・宮原とたなか亜紀夫の「かぶく者」を事例に次に青年マンガにおける女形表象の多様性にも注目する。「かぶく者」は、ビジュアル、物語構成、コマ割り、キャラクターデザインから判断すれば青年マンガだとみなすことが一般的だろう。この作品は主に構築的な線で描かれており、一見すれば少女マンガ的な線、つまり可塑的な線がない。しかしながら、異性装する女形のモチーフにおいては構築的な線には可塑的な意味づけが生じているのだ。

主人公新九郎は二人の女形（恋四郎と月之助）と舞台上で共演する間、恋愛関係のようにお互いのアートに夢中になる。恋四郎は美少年らしいゲイであり、歌舞伎の世界では新たな表現をめぐるグループに所属している。歌舞伎の世界にとって恋四郎は黒幕である。新九郎との演目は「籠釣瓶花街酔醒」、八つ橋の役である。月之助は保守的な梨園の表象であり、男性らしい家父長制的なキャラクターだ。演目は「東海道四谷怪談」。このように「かぶく者」では二人の女形には二つの男性性と二つの女性性が存在している。

本論は、女形のジェンダー構成を通して、「かぶく者」における線、コマ割りによって身体の断片化を研究し、この表現の可塑的な機能を分析する。また、通常の間と舞台上の間の分析を行う。恋四郎の断片的な表現はスーツ姿でも、舞台上の間でも同じ身体の部分が強調されている。さらに傾城の八文字におけるスローモーションとクローズアップを分析する。

身体の断片化による服装の下にある男性体から局所をさらし、この断片によって「女性性」をあらわしている。このことは主人公新九郎のセリフからも読み取ることができる。

もう一方、身体のクローズアップは、キャラクターのモノローグと同時に描かれている。このモノローグに合わせて身体の線、断片性と反復は可塑的なものとなる。読者は線のリズムから身体的な動き、筋肉の緊張感を感じ取る。キャラクターのモノローグがジェンダー化された身体の断片化とスローモーションと組み合わせることで、身体表現は可塑的なものとなり、キャラクターの内面を読者に物理的なレベルでも体験させることが可能となる。

他方で、主人公は女形の服装と型を対象 a として読み取ることができるために、異性愛的に解釈することも可能であるが、それと同時に主人公の男性性ゆえにボーイズラブとして読み取ることにも可能である。特に恋四郎の場合美学的にも美少年同士の関係を想像しやすくなる。しかし、ボーイズラブとして読める可能性を批評的な意味の読み取ることとして直接に結べることは間違いではないかと思う。つまり、ボーイズラブの批評的な様相は現在では批評的に読まれているとは限らない。娯楽的な読みのほうが多いだろう。代わりに、青年マンガとして読む読者のほうが批評的な意味を読み取るのではないかということが傾向として考えられる。青年マンガの特有性は物語の中の世界とキャラクター設定をより詳しく設定する。データベース的な様相があれば、初心者読者でも読めることができるだろう。その為に歌舞伎に興味ある初心者読者もこのマンガを読める。「かぶく者」は多様な消費に合わせた作品であり、それぞれの読者を結べられるフォーラムにもなりうる。

第4章 少年マンガにおけるオルタナティブな「自分」としての女装美少年

青年マンガに含まれている、再解釈されている少女マンガの約束事を批評性の第一レベルとして分析した。第4章では第2批評性の可能性：男性的な内容と用語の意味合いの変化に注目する。パロディとして少女マンガとボーイズラブマンガを圍繞する作品を事例に、期待されているリテラシーのレベルとリテラシーを深める課程を分析する。「青年」と「少年」ジャンルと言う表現、または連載雑誌の出版形式があるからこそ、ジェンダーの面では男性的な表現は大きく変化することができた。ジャンルのジェンダーによって、階層は、男性的なジャンルが基本であり、女性的なジャンルは補助であるとして、用語のレベルでは残っているが、実際の内容の変化と男性的な主人公の変身が男性読者によって消費されるようになった。ひらかわあやの「国崎出雲の事情」は少女、萌えジャンル、とボーイズラブジャンルの様相をパロディ化する。パロディはパロディ化されている原料のリテラシーに基づいている。少年マンガは男性読者に期待されている女性ジャンルのリテラシーレベルが明らかになる。批評的なテーマの挿入に限らない批評性を分析する。またはパロディは原料に使われている記号に新たな意味を与える。結果的に原料の記号の最初の意味が文脈の中に登場し、変化可能であると表す。パロディを事例に美少年という引用が青年と少年マンガ

の主人公となり、家父長制から離れた主体性の再解釈を引き起こすだろう。けれども、この再解釈はパフォーマンス論によって確実に批評的に読められるとは確実ではない。

第4章ではバトラーのエージェンシーと主体の成り立つ家庭 (subjection) の議論は主な方法論となる。バトラーによると、主体になる過程は大文字の他者 (社会、政府など) と個人の間で行われている個人の多面的なパフォーマンスである。個人は社会の脈絡の中で意味をもたらすようになる為・主体になる為、家父長社会に使われている「用語」を利用し定義付けられるように体现しなければならない。けれども、個人は社会によっていくつの側面から定義付けられる。例えば、男性である、社会階級に所属、結婚されているかどうか、収入、人種などの側面を持つ。一つだけの側面によって個人は自分を理解していない。選択肢があって、その多数のパフォーマンスを断片化し、断片を個人が自由に組み合わせ、このパフォーマンス繰り返している。個人的なアイデンティティと社会的な主体性が生じる。社会に関して主体的な立場のある個人は他の社会的な弱者としての側面をパフォーマンスの中にも含まれている。例えば、男性である、お金もちである、ゲイである、など(Butler 1997: 84, 91-92)。

「国崎出雲の事情」は分かりやすい少女マンガの約束事を利用し、それに逆の意味を付けて、冗談として描いている。例えば、主人公出雲の美しさは多くのキャラクターにボーイズラブ的な戸萌え的ファンタジーを想起させる。でも、出雲自身いつもこのような扱いに反対したり、けんかしたり、受け入れていなかったりする。女性ジャンルをバカにするように見えるが、作品中では実際に女性ジャンルの表現リテラシーを読者に期待する、または物語の発展によって女性ジャンルの約束事が増えていく。10巻以降、物語の中でも本格的なボーイズラブのキャラクター同士関係も含まれている。

「国崎出雲の事情」は男性読者に女性的な内容を読ませる行動様式を明らかにする。このマンガでは女形の少年は主人公となる。出雲は女装嫌いで、女らしく振舞うことも嫌い、にもかかわらず、ずっと女装しなければならないというシナリオの中に置かれている。自分の男性性を守るために彼は全てのクィアな行為に「男性らしい」再解釈を考えている。物語の中で二つの引用の利用がある：1. 萌え、少女マンガ、ボーイズラブマンガのユーモアを目指すパロディと 2. 少女マンガ約束事によってキャラクターの本音・純正な感情を描く事だ。つまり、原料の記号を別の意味で使うことと引用を元の意味で使うこととの二つやり方である。引用の回数と物語内の強調は確実に角巻きで増えていく。段階的な約束事の挿入が男性読者に期待されており、また少女マンガリテラシーを解釈を高める教育を行いことが明らかである。主人公出雲のように、このマンガ実際でも、男性性を基準にその登場人物を再解釈する、特に、新たな主人公を紹介する。

本論では最初に引用の類を並べる：1. 萌えマンガのパロディ、ボーイズラブマンガのパロディ。これらは、出雲を客体として他のキャラクターの目線から描かれている。出雲は男だと知らない、知っても客体として扱うキャラクターの目線。2. 少女マンガの約束事によって、キャラクターの内面描写を描く、具体的に感情的な場面と舞台上の場面。次にこの描

写の物語上の役割を分析する。冗談のネタの萌えや、ボーイズラブの場合はこの冗談は「国崎出雲の事情」の一番大きな特徴である。けれども、プロットに関してはこれらは影響がない。取り除いても、物語を読むことができる。逆に、感情的な描写に使われている少女マンガらしいシーケンスは直接に物語を語っている。両方の表現は段階的に増えて、複雑になる。つまり、このマンガは読者に対して少女マンガリテラシー教育も行う。

出雲の主体性は多面的である。一方では出雲と他の男性キャラクターは皆先述した美少年の特徴を含んでいる：内面のビジュアル化、流動的な主体性など。従って、出雲はいわゆる男性の身体を自分の男性性と一致している、または自分の全ての行為を「男の中男」として再解釈し、この自己識別は男性読者のジェンダー不安を抑えることもできるだろう。多数の参照点によって読者は多様な読みと消費ができるだろうが、「国崎出雲の事情」の特有の冗談は明らかに読者にリテラシーを期待する。

「国崎出雲の事情」の出版形態は男性読者にとって新たなテーマ、キャラクターと表現に触れ合う安全な場を用意する。男性ジャンルの一部として男性読者はこの作品に対して批評的な立場を取れる、つまり、男性読者はこの作品を受け入れるかどうか選択する主体性を持つ。この様に男性読者はあくまでもマンガに対して主体的な立場に置かれている。言い換えると、新たな内容を少年マンガの中に受け入れるかどうか、または女性マンガに関して否定的な立場も取ることができる。マンガ業界では表面的に女性読者は今でもゲストとして見られる。しかし、その文脈の中で家父長制的な価値観は中から転覆されていることも明らかである。この変化は読者の意識に影響を与え、いつか読者のアイデンティティをも包括していくのではないか。

こすると、批評的なテーマとモチーフを直接に取り上げることを避ける作品でも、批評的な消費を期待してない作品でも家父長制的な記号の意味解釈を転覆する可能性がパフォーマンスの中から生じる。マンガは直接に批評的なテーマを使う可能性があっても、批評的な意味を目指す作品は業界の観点から大衆向け成功しにくいだろう。この環境ではベルントみたいにマンガの影響幅広さを利用できる方法を考えると「国崎出雲の事情」のやり方は家父長制に対して影響がありうるだろう。新たなテーマ、例えばクィアジェンダーなどの問題、クィア主人公との同一化が可能になったのはバトラー述べている通りエージェンシーのパフォーマンス性のためだろう。男性ジャンルは家父長制的なエージェンシーがあるため、少年、青年と言う用語利用し、用語の意味合いの転覆が可能になる。大衆によってパフォーマンス（最近のジェンダー化されたジャンルの変化）は「少年」・「青年」・「男性的」と言う家父長制的な用語の意味が変化する。この消費環境に育った読者は自分の男性性を再解釈できる。またジャンル横断的な読みを無差別的に読者を同じ内容を通じて会話させることも可能になる。

審査結果の要旨

本論文はマンガをポスト・モダンなメディアとして把握し、そのパフォーマンス性に焦点を当てつつ、ジェンダー批評的な視点から論考を展開したものである。特に最近、国内外の多くの読者が既存のジェンダー化されたジャンルの枠組みを超えてマンガを読んでいるという現象が注目されている。本論ではその現象を出発点とし、その背景にある状況やそこから読みとれる事柄を明らかにすることを目的とする。

著者はそこで「クロス・ジャンル」や「ジャンル・フュージョン」を可能にしている状況を分析し、その批評的な可能性を明らかにしている。また、方法論的な革新点としては、ジュディス・バトラーのジェンダーやパフォーマンスティヴィティに関する理論やジャック・ラカンの *petit objet a* (小文字の対象 a) を活用し、これまでマンガ研究でなされてこなかった形でテキスト分析を行っている。特に、「male (男性的)」と思われる「青年」や「少年」ジャンルのテキストに焦点を当てており、間テキスト性を分析していることが評価された。さらに、「美少年」という「female (女性的)」ジャンルから由来するキャラクターを取り出し、近年注目されている「歌舞伎マンガ」に登場する「女形のキャラクター」の分析を通じ、ジェンダー批評的な可能性について興味深い論考を展開している。「青年」や「少年」または「歌舞伎マンガ」というジャンルにおける「female mode of address (女性的な表現)」に注目することによって、マンガ特有のナラティブ及びヴィジュアルなメディア手法がいかにジェンダー的流動性を可能にしているかについて、論じている。

本論のパート1では、マンガにおけるメディア・パフォーマンスティヴィティやマンガに内在している「複数の意味」について考察している。主にオレ・フラーム、東浩記の研究を踏まえ、マーケティングによるジャンルのジェンダー・カテゴリーの形成について論じている。パート2では、キャラクターの中心的な役割について考察し、少女マンガにおける「美少年」の由来の歴史的経緯が竹宮恵子『風と木の詩』などから辿られている。パート3では、青年マンガ(漫画/たなか亜希夫、原作/デビッド・宮原『かぶく者』他)を分析しながら、テキストにおけるジェンダーの固定的概念を揺るがすテーマやその結果として家父長的な言説を覆す可能性という二つの批評的視点が提示、深化されている。パート4では、少年マンガ(ひらかわあや『國崎出雲の事情』)を分析しながら、そのテキストにおいて複数の「ジェンダー流動的」な読みが可能であること、つまり「ドラァグ」のように理解することができるという考え方が展開された。

本論文は内容において、新しい知見が多く含まれているという点は、高く評価すべきである。「ジェンダー研究」の新しい視点からマンガ研究に貢献しているところは特に注目すべきであろう。また、これまでに十分とりあげられ、分析されてこなかったマンガのテキストが詳しく紹介され、論じられているという点においても、評価すべきものがある。

著者は特に「ジャンル」におけるジェンダー性に注目し、そのパフォーマンスティヴィティを指

摘しながらジェンダー論的な分析をしており、これまでマンガ研究にはない視点と批評を提示している。具体的には、「美少年」というマンガのジャンル横断的な主・客体と、「女形」という日本文化内でのジェンダー横断的・越境的なパフォーマンス性が中軸をなす主・客体をキャラクターとするマンガの意味、およびそれを読むことの意味を考察している点で大変オリジナリティが高い論文である。

また、本論は、理論的考察として深みがあり、特に「美少年」をまなざす視点の可変性とそれがもたらす解釈の流動性、さらに、そこから展開されるキャラクターやジャンル作品の多面性に関する論考は、複数の先行研究を踏まえたオリジナリティのある部分であり、「女形のキャラクター」を軸とした作品論としても興味深い内容になっている。

上記のような成果と課題を有す本論に対し、学位審査で慎重に意見交換をし、著者に論理構成をより整理することを依頼してその手直しを再確認し、その結果査読者全員が博士論文として合格レベルに達している内容であると判断した。なお、本論文が学位審査の対象となるのは3回目だったが、論点の整理、概念の定義、研究成果の貢献度など、前回までの申請内容に比べ、着実に進展したことも確認できた。本論文が公刊されることを期待するものである。